

わらの兵隊とTPP

兵隊なんて、ぶっそうなものではないのですが、稲わらを7、8束まとめて、鉢巻のように縛って、立たせた姿がこちら。向こうには、横棒にひっかけた、わらの城壁？が。

踏み込み温床や敷きわらに使う、必需品の稲わらを、近隣の方に譲ってもらい、畑に運んでこんな風に保存すると、また来年も同じようにできる、と、ほっとします。

この辺は、他の仕事をしながら小規模な田んぼを維持している方が大半です。基盤整備にかかった費用を支払い、機械を維持し、あるいは刈取り乾燥を知りあいに頼んだりして、家族や親せきのために、米を作っています。でも、条件の悪いところは休耕するのか、荒れてくる田んぼもちらほら増えています。以下、今年の米価の政府引取り価格の下落を受けて、山形の百姓・菅野芳秀さんが書いた文章を引用します。



今年の農家の米売り渡し価格は農家にとって「首をくって死んでしまえ」と言われているようなものだ。今から30年前の1984年(S59年)、一俵(60kg・玄米)あたりの農家の売渡価格は平均で18,668円だった。自主流通米では22,000円ぐらいだったと記憶している。それが仮渡価格とはいえ今年は一俵あたり8,500円。一年後の「精算金」を含めても1万円を超えることはないに違いない。

一方、今年の2月に農水省は2012年(H24年)産米の生産費を発表した。その全国平均が1俵/60kgあたり15,957円。今年はお騰もあってももう少し高くなるだろうが、それを8,500円で販売しなければならない。

仮にその生産原価に含まれている36%分、5,744円の労働費をゼロにしたとしても、10,213円で、今年の販売価格には遠く及ばない。農家が一年間のタダ働きしたとしても追いつけない安値。

これでどうやって暮らしていけるというのだ。後継者なぞ育つわけがない。

政府の「成長戦略」によって規模拡大してきた農家ほど打撃は大きい。今年もたくさんの農家が農業から離れて行くだらう。

この安値の背景に、山形県米生産量のほぼ倍に匹敵する年間80万トンの輸入米がある。GATT-WTOで約束させられたものだ。TPPの締結はこの傾向を更に増大させ、6,000円代にまで米価を押し下げられるだろうと言われている。

…中略… 日本の米作りはほぼ壊滅だらう。

仲間が増えました

今から9年ほど前、2005年6月に、野の扉・研修生・第一号として登場した、中村幸雄さんを、覚えていらっしゃる方もいると思います。群馬県の大規模農家で働いていたけど、自分の手で好きな野菜を作りたいと、ネットでのうちの研修生募集の記事に目を止めて来てくれました。1年ほどで、近くで家と畑を借りて独立営業を始め、「よりの輪組」の一員となり、共同出荷の仲間としてやってきました。畑も広げ、営農に適した借家に引っ越し、マイペースで暮らしていましたが、今年の雪害がきっかけで体調を崩してしまいました。自分の畑の作付けを独力でやるのは無理だけど、少しずつうちの作業に加わって、元気を取り戻しつつあります。

幸雄さんや以前ご紹介した大川さんに手伝ってもらって、雪害にあったハウスの解体をやっとすべて終えました。壊れたハウス5つのうち、再建に公的支援が受けられそうなのは、一つだけ。それも、まだ材料が届きませんし、忙しい業者には建設を頼めないかもしれません。春に向けての作付けのために自力で建設するにも、残る山の鶏小屋の解体をするにも、幸雄さんに力を発揮してもらうことになるでしょう。(10月20日 泰子)



菜園「野の扉」 〒369-1214 埼玉県大里郡寄居町今市228-3 伊藤 晃・泰子

TEL/FAX 048-582-3645 E-MAIL nonotobira@ybb.ne.jp

ホームページ <http://nonotobira.typepad.jp/new/> ブログ <http://nonotobira.typepad.jp/blog/>